



フェローシップ生 募集について

MIRAIのフェローシップ生に申請を予定している方は、
ウェブサイトにて募集している時期の募集要項等をご確認ください。



詳しくは

<http://www.tufs.ac.jp/mirai/fellowship/recruit/>



国立大学法人
東京外国語大学



<https://www.tufs.ac.jp>

多文化共生イノベーション研究育成フェローシップ MIRAI

2023年3月発行

<http://www.tufs.ac.jp/mirai/>

お問い合わせ先

東京外国語大学 MIRAI推進室

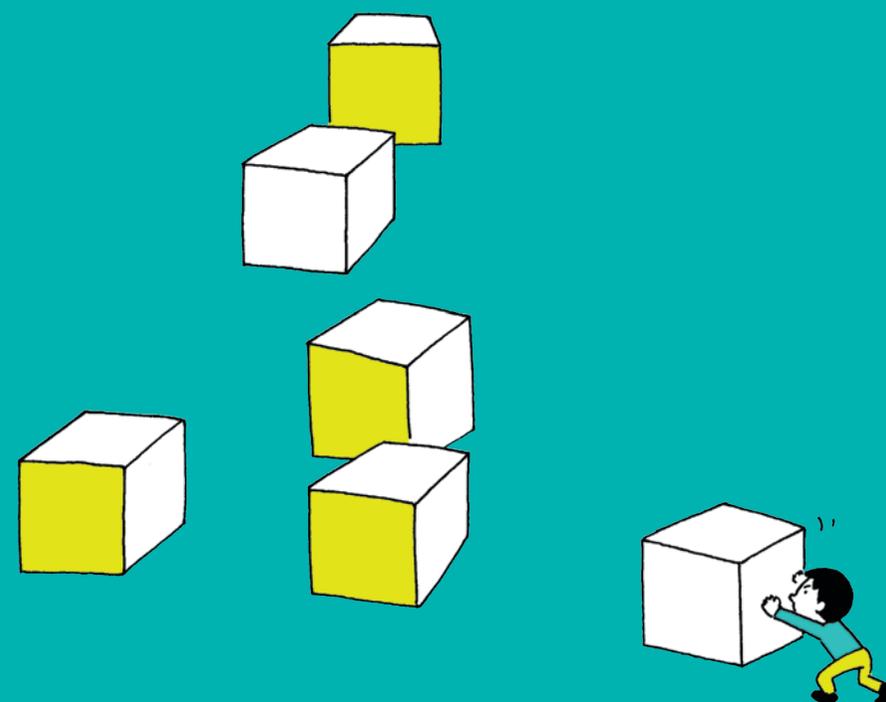
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 [研究講義棟 401]

Email: mirailab@g.tufs.ac.jp

多文化共生イノベーション研究育成フェローシップ

Multi- and Inter-cultural Research and Innovation Fellowship

MIRAI



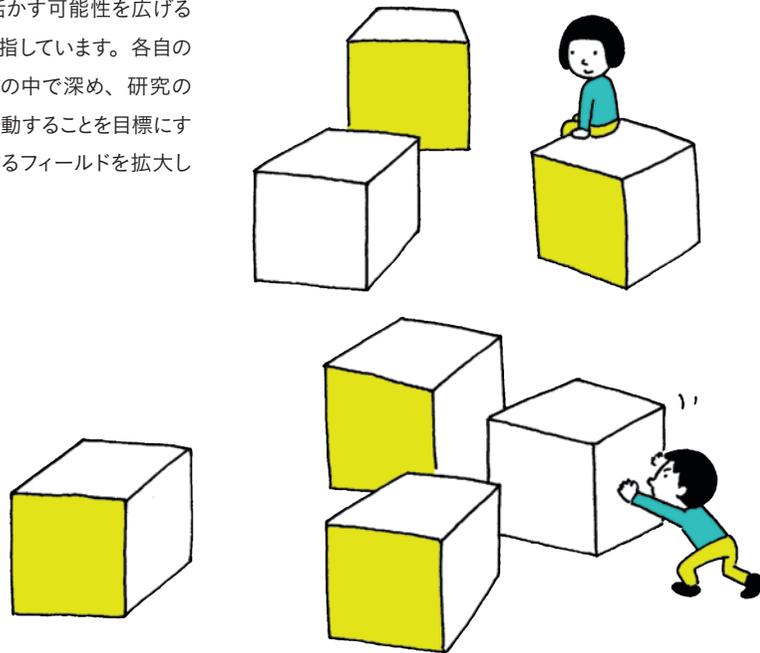
東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies (TUFS)

TUFS の MIRAI

MIRAIは、大学院博士後期課程の大学院生を対象として、研究深化・キャリア開拓を支援するフェローシッププログラムです。複雑に絡み合う社会の問題に対峙するため、大学における研究活動は社会の中で実践され、解決の糸口となることが求められています。東京外国語大学のフェローシッププログラム「MIRAI」はそのような期待に応え、高度な専門性、研究能力をより広い文脈で活かす可能性を広げるための、総合的キャリア開拓支援を目指しています。各自の研究活動を他分野や社会との関係性の中で深め、研究の発展と貢献の可能性を広げるために行動することを目標にすると同時に、若い研究者たちの活躍するフィールドを拡大しようとするものです。

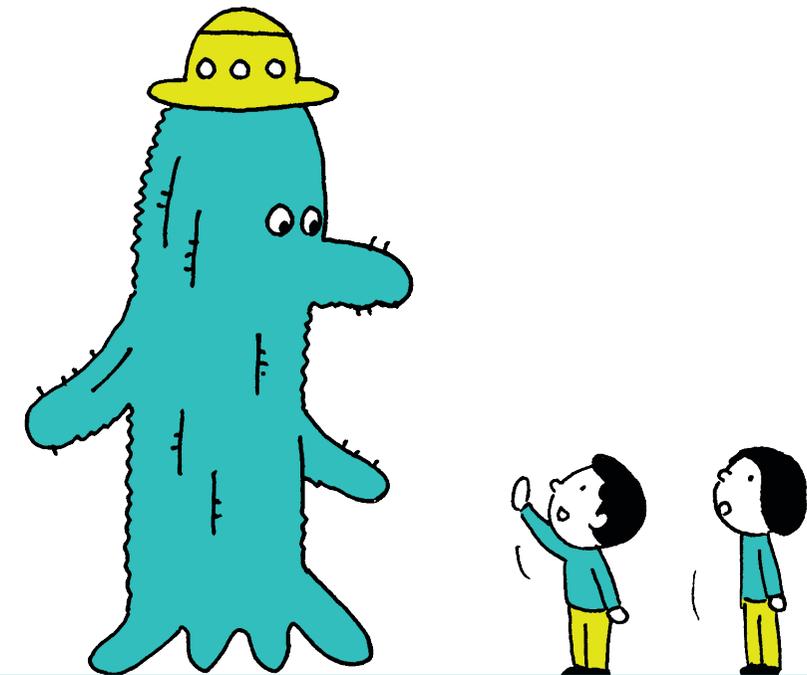
ようこそ、MIRAIへ。



であう

自分以外の世界に触れる 知らなかったことを経験する

従来の研究活動においては、一つの専門分野で論文を書く、学位を取る、著書を出版する、といったことを通じて知見を深め成果を発信していきます。しかしこういったサイクルの中ではめぐり会えない人や事柄、出会えない世界があるのです。例えば文系の学生と理系の学生、他の分野で問われているテーマ、学生と企業人との接点などは、ほとんどないでしょう。人との出会いが広がれば、今まで知らなかった新たな世界、異分野との出会いも生まれます。キャンパスを越えた社会との接点は、個々の研究活動にも新鮮な刺激をもたらし、視野を広げてくれるはずです。MIRAIは出会いを生む「きっかけ」「機会」「場」を提供します。それらを活かして学生自らが積極的に出会い、自分の新しい可能性に出会えることを期待しています。

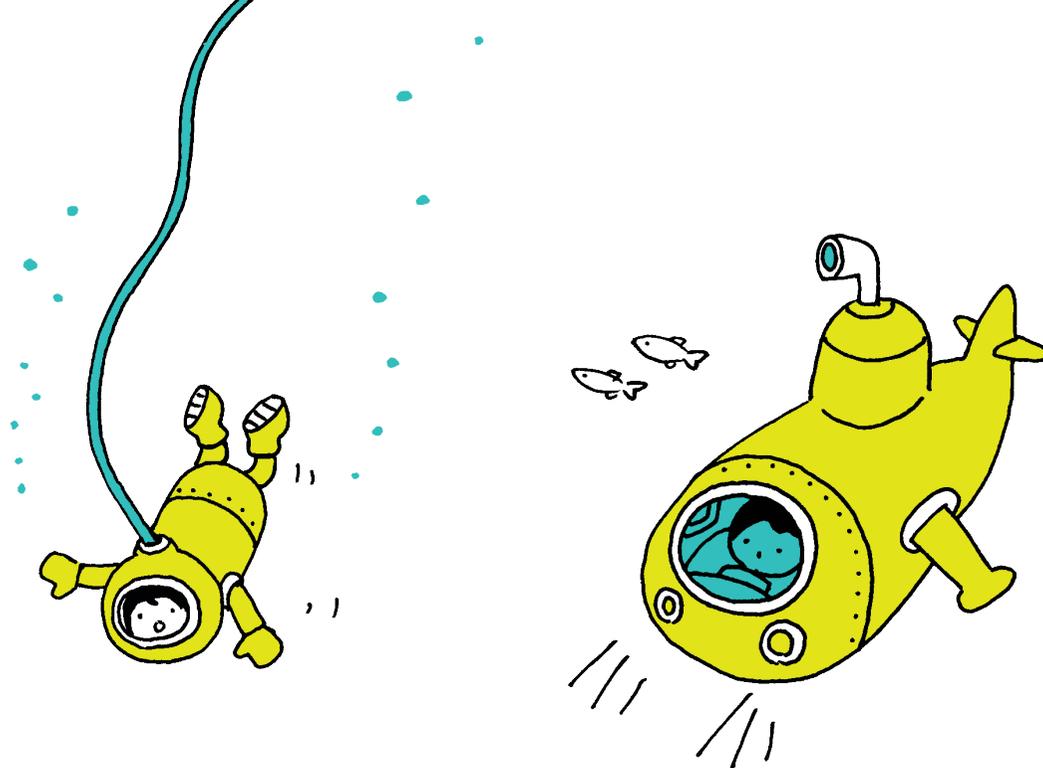
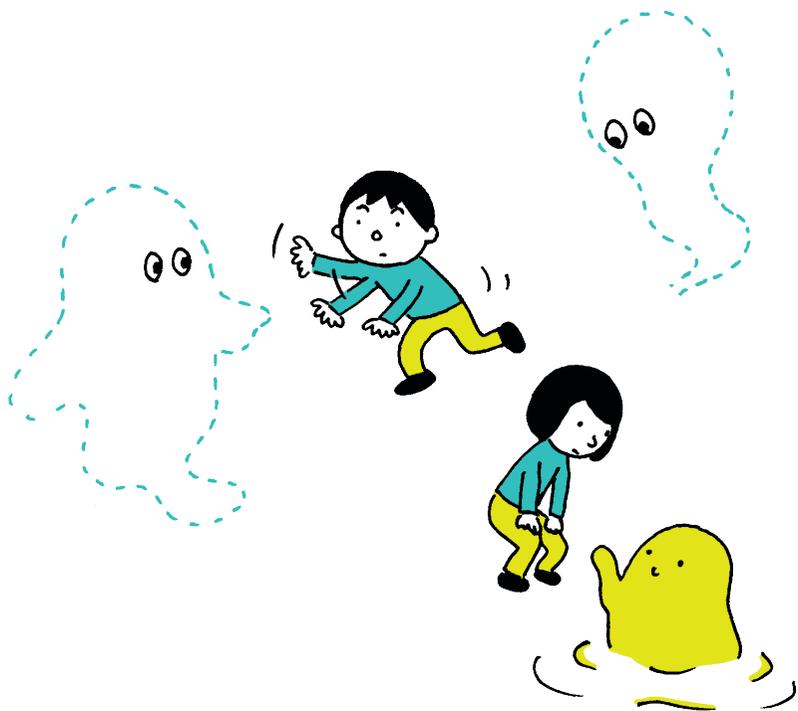


きづく

今まで見えていなかったこと
自分が見ている世界に限界があること 境界線に気づく

MIRAIの大きなテーマは「探求すること」。自分はなぜ研究したいのか、自分が探究したいものは何か、研究と仕事をどう結びつけたいのか、誰に向けたどのような価値を生み出したいのか——。これらを突き詰めて考えていくと、「自分とはどういう人間なのか」という問題にも行き着くかもしれません。異なる専門分野の学生が集まるMIRAIのゼミでは、それぞれが問いや課題を持ち寄って起こる対話を通じて、さまざまな気づきを得ることができます。他大学や社会との交流から新しい発見が得られることもあるでしょう。

自分の専門分野から外に踏み出したとき、世界が対峙している問題が実にさまざまな要素が絡み合う複雑な構造をしていることに気づきます。ある解決策はある一面のみに目を向けたものに過ぎません。自分の興味関心が広がり、俯瞰的に社会課題を見つめ直すことができたとき、一人の研究者としてできる最善には限界があることに気づき、協働の大切さを認識し協力しあうことで、より遠くに行けることを知るのでした。

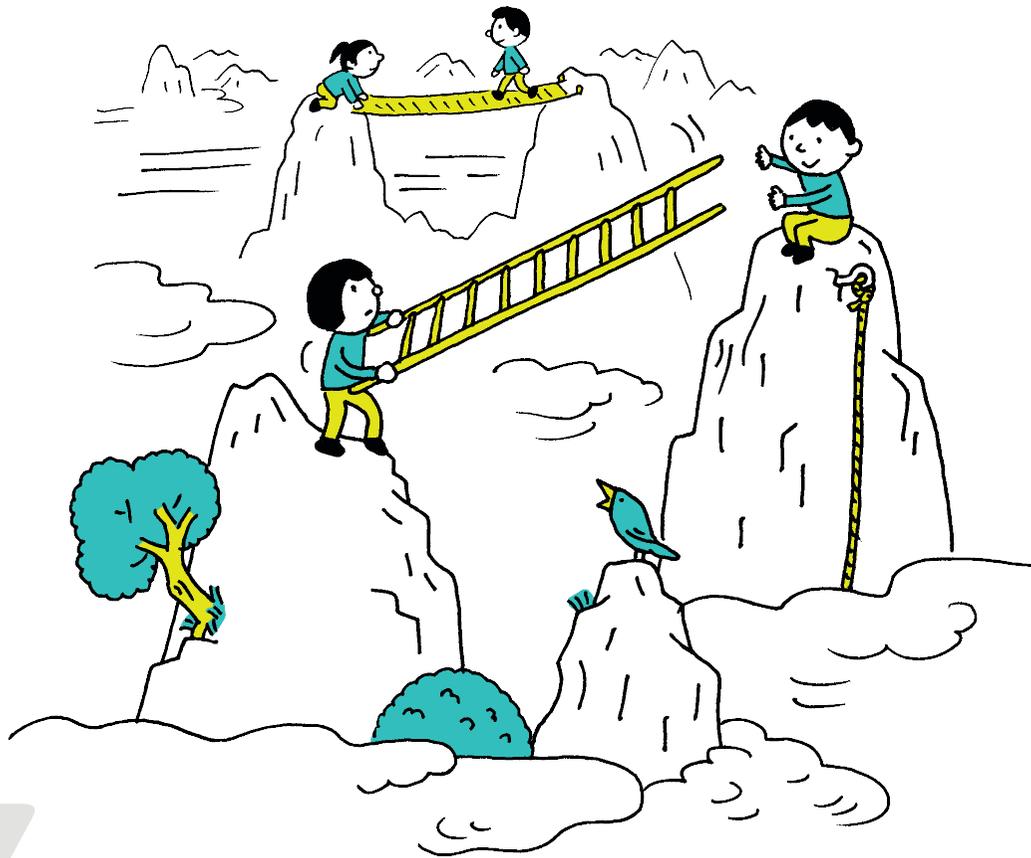


ふかめる

世界がどのように形づくられているのか深掘りしていく
複層的・重層的な視野で深める

自分が取り組んでいる研究はアカデミアにとって、社会にとって、人間にとって、どのような意味があるのか。研究活動を続けるための意欲の源泉として、常にこの問いが自分の中に存在しつづけるでしょう。その問いに対峙するために、まず自分の研究を取り巻く関係性についての認識を深めることが必要になります。アカデミアでの関心にとどまらず、社会課題や企業・自治体など、幅広いステークホルダーの抱える問題意識に寄り添い、自分の研究力でその問題意識に応えられるよう努めて、はじめて自分の研究の関わる世界が広がっていきます。「自分が誰と向き合いたいのか」からスタートし、どうすればその相手との協働を生むことができるのか、より多くの人と知を共有し、育むためにはどうしたらよいのか、という道筋を仲間と一緒に考えはじめてみませんか？

MIRAIは、自分自身の研究の価値と意義を、社会との関係の中でより広い文脈に位置づけるための手助けをします。



うみだす

研究と社会の新しいつながり、その意義と新しい価値を生み出す

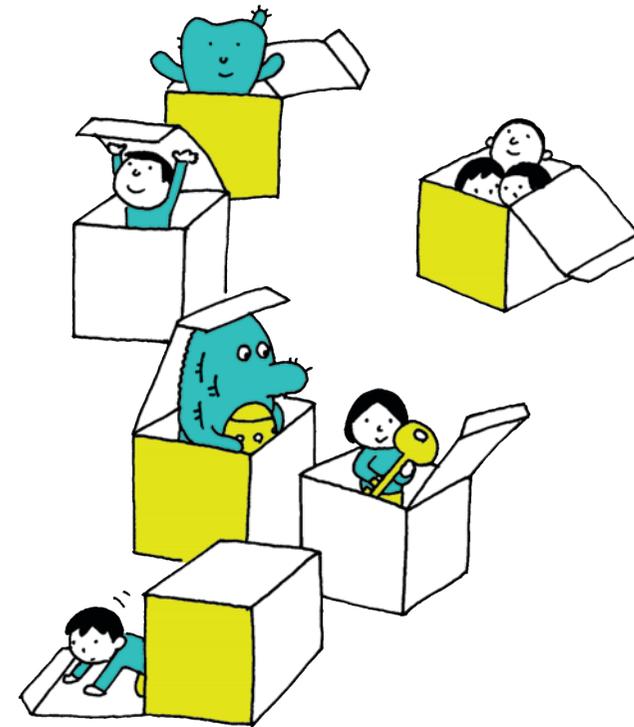
博士後期課程の3年間、学位論文の作成などで忙しい中、MIRAI生はMIRAIプログラムを通じてキャンパスを飛び出し、異分野の学生・研究者との交流、企業との交流、自身のキャリアの考察など、さまざまな活動に参加します。

限られた時間の中でMIRAIプログラムの活動に参加するのは簡単ではありません。しかし自分の研究力をより広い社会の中で活かすチャンスは、キャンパスに閉じこもっていても誰も運んで来てはくれません。いつものコミュニティから抜け出し自分を俯瞰的に見つめ続け、理想を言えば、自分に新しい価値を作り出すことに挑戦してください。例えばMIRAI生を中心に、異なる研究分野をつないだ共同研究を起こすことだってできるかもしれません。そのような経験が、将来的にはビジネスの中に身をおいたとき、異なるバックグラウンドやスキルを持つ人たちとともに、新しい価値を創造し、提供するための能力として役に立つかもしれません。一人で何かを起こすのは難しくても、誰かと補い合い長所を活かし合うことができれば、大きな強みになるでしょう。研究者の活躍できるフィールドを限りなく広げることも、MIRAIの目指すところです。

こえる

一つの分野にとどまらず、互いに領域を越えて行き来する
さまざまな領域をつなぎ 経験を広げていく

分野の境界、大学と社会との境界、自分と他者との境界、そんな境界から解放されればされるほど、好奇心は限りなく広がり、研究の可能性も広がっていきます。MIRAIの3年間で経験できる物事は限られていますが、自分の好奇心を大切にしながら、他者の好奇心とその背景にあるものを理解し、相互の垣根を越えて交流しようというマインドさえ持っていれば、その後、何かの活動や仕事をするときにも必ず役に立ちます。そのマインドの原点をこの3年間でつかむこと、それがMIRAIの目標です。



MIRAIを創る人

1



長谷川 健司さん

profile……自動車会社勤務を経て、放送ディレクターとして教養番組や多言語番組の制作に従事。2022年4月、東京外国語大学大学院博士後期課程入学。工場の生産ラインで働いた経験から、「サイバネティクスの思想史」という研究テーマにたどり着く。現代世界の統治を支える科学と知識の歴史を、それを生み出した人びとの言葉を発掘してたどることで、人間を（機械のように）扱うことの哲学的問題に取り組んでいる。

研究することが目的ではない。 「どう良く生きるか」を考え、実践する場

研究とはあくまでも人生の一部である

人文学、とくに思想研究という分野は、資料と一対一で向き合うだけでも研究を進められるかもしれません。しかし、あえて大学院で学ぶのなら、アカデミアの壁をやすやすと乗り越えて人と人が関係し、組織化してプロジェクトを動かしていかないともったいない。そう考えているところへ運

良く出会えたのが、このMIRAIでした。

私の場合はやや特殊で、大学院生であることが生活の中心ではありません。私は社会人を経験して大学院博士後期課程の学生として東京外国語大学に在籍していますが、外部からアカデミアに戻ってきた人間の目だからこそ見えてくるものもあります。研究者にとっての研究は、その人の人生の一部でしかないわけです。研究だけを見

ても、どういう思いでその研究をやっているかというのはわからない。歴史や生活感、発想や好き嫌い、政治的な信条など、そういう研究を取り巻くコンテキスト、全体を見ていかないと、自分もなぜ研究するのかがわからなくなってしまいます。仕事のために生きるのは幸せではないという考え方と同様に、修行僧のように研究を自己目的化して数年を費やすというのは健康ではないと思うんです。MIRAIは、院生が無意識に自己目的化してしまっている、「研究（のみ）でつながらなくてはいけない」という呪縛に一石を投じる場だと思っています。

全体性を持った「知識」を身につける

教育機関における勉強というのは、各教科のコンテンツを切り売りで消費しているようにも感じます。しかしそれが「学問する」となると、統合性への志向が必要になってくると思います。学問はいろいろな分野、例えば芸術や音楽などにもつながっているし、日常生活の実践と地続きの部分もある。論理的思考にめっぽう強い人でも自分の専門知識をパソコンの「フォルダー」で整理するには綺麗に分割することはできないし、そもそもそうする意味もありません。自分の研究を含め、知識を統合されたひとつながりのものとして意識する方が、人生に豊かさをもたらすのではないのでしょうか。

個別の研究分野やディシプリンに固執するのではなく、もっと全体性、包括性を持った知識とは何だろうと考える必要がある。アカデミアで知識を求めることの価値を繰り返し考えていきたい。しかしそれを一人で考え続けるのはしんどい。顔の見える具体的な関係性の中でないと、形にできないし、考え始めることもできないと思います。その点、MIRAIには日常の素朴な気づきや「研究室ではちょっと言いづらいこと」を共有できる仲間がいて、自分がどう良く生きるかを考えるときに頼りになるありがたい場ですね。

リミッターを解除してみてもわかること

大学院に身をおいてみると、みんなとても真面目なので、もっ

と遊んでもいいんじゃないかと思うことがあります。大学院生としてのあるべき姿みたいなものが枷になっているのか、堅苦しすぎる。学問は大学受験や資格試験に向けた詰め込みとは何も関係がない。「研究＝研究室の中で完結するもの」だと決めつけず、例えば買い物に行くとか、友達と美味しいものを食べに行くとか、そういう日々の実践の中から新しいものを生み出すというパスがほしい気がします。自分が無意識に持っている素質に気づく、あるいはそれを再評価する契機を作るには、真面目なだけではつらい。専門用語を上手に操るだけでなく、実際に動いて体験していかないと気がつけられないものがたくさんある。かっこつけずリミッターを解除できる場を作れるといいですね。

そもそも学問の本来の姿は、決められた研究計画を「こなす」ことにあるとは思えません。そうではなく、偶然の出来事や予想もしなかったことに出会ったときに、人に伝える言葉を生み出し、話し合い、自分たちの未来の行動にフィードバックしていく力を涵養することにあると思います。MIRAIでは自分がこれまで研究してきた分野や出会ってきた人たちと、全く違うものに出会うので、今までの人生の中で生じえなかった疑問を突き付けられます。それを繰り返していくうちに、振り返ってみると半年前の自分よりも成長している、そういう場にしてほしいと思います。

MIRAIは 自分自身を実験する場

研究をしていると行き詰まることがよくあります。でもそんなとき、誰かと協働すれば思いもよらない可能性が開けることがあります。MIRAIは自分だけでは気づけなかったそんな驚きの「化学反応」を実験できる場です。



MIRAIを創る人

2



宮本 ももこさん

profile……沖縄で育ち、高校時代にハワイ、大学時代に中国への留学を経験。山口県立大学国際文化学部国際文化学科卒業。東京外国語大学大学院総合国際学研究所世界言語社会専攻博士後期課程在学中。東アジア（とくに沖縄、中国、台湾）をフィールドに、地域のセーフティネットの再構築の方法を研究している。沖縄の子ども食堂についてのフィールドワークを経て、中国版/台湾版子ども食堂を運営するプロジェクトを実践する道を模索中。

当事者の目でとらえる沖縄問題と
辺境東アジア地域への広がり

沖縄で育ったことに誇りを持って

私は幼い頃に、両親の意向で沖縄に移住しました。高校時代にハワイに留学した際、現地の沖縄県系3世の方々の暮らしに触れ、沖縄で育ったことに改めて誇りを持つようになりました。それが今の研究につながっています。当事者の意識はありつつ、ルーツは持たないため、沖縄の

地縁やしがらみに抑え込まれない視点で研究することができていると思っています。MIRAIゼミに参加しているメンバーは生きてきた背景がそれぞれ異なり、海外留学経験がある方も多いため、沖縄についてはどう見えているのかを知りたいというのが、興味の一つとしてありました。ただ最初は、みな忙しい上に全く違う分野の学生が集まっているので、なかなかコミュニケーションがうまくいかなかった

たのが実情でした。表面的につながっていても、心からの言葉を交わせる仲にはなれていない。MIRAIの目的は頭で理解していても、具体的に何をやるか、何を生み出したいか、話せる機会がない中で、鬱憤もたまっていきます。MIRAIでは学生がペアになってテーマを設定し隔週1回のゼミを行っていますが、コミュニケーションを円滑にしない限り、お互いにとって良い作用は生まれませんのではないかと考え、私が担当するゼミのときにワールドカフェという催しを開催しました。会議形式でなくリラックスした中で互いの思いを話し合ってみると、結構みんな楽しんでくれて、継続したい、こういう話の場は必要だという意見も出てきました。それをきっかけに、MIRAIゼミは良い流れになってきたと、個人的には感じています。

広い分野の人が関心を持つことで前に進む

その後、北海道大学との合同合宿があり、分野を越えた研究者同士のつながりが経験として得られました。ルームメイトは土壌の研究をしている学生。研究分野が違うからこそ、しがらみなしに、学部時代の友達のようにフランクに人間として付き合える友人もできました。「研究している人」の持つ魅力を感じましたし、分野の異なる同世代の研究者から刺激をもらい、自らの研究のモチベーションが高まったと思います。

研究者であるかに関わらず、意見交換は重要で、例えば子ども食堂はさまざまな社会問題とつながっている営みなので、社会福祉、社会政策、自治体にとどまらず、もっと広くいろいろな分野の人たちを巻き込みたい。一人のできる範囲は少ないので、他の分野の方にこの研究を伝えることで関心を持ってもらえると、社会は一步先へと進んでいこうと期待をしています。そういう面でも異分野交流やプラットフォーム作りは重要な課題ですね。アカデミアである必要はなく、今ならSNSを使うなどの方法もあります。私も最近、自分のSNSで沖縄の情報を発信していますが、それを見た地元の人から「今沖縄がどうなっているのか教えてほしい」という質問を受けることも増えてきました。正しい情報を発信できて誰でもアクセスできる場づくりを、MIRAIの人たちと共同で考えられるといい

のではないかと思います。自分の知らない分野、例えば私なら環境問題や軍事の専門家などと、月1回でも討論会や交流会といった機会が持てたら、たぶんそれは研究者にとっても社会にとってもプラスになるはずです。

研究者と現場のギャップを埋めたい

私が今取り組んでいる沖縄は圧倒的に政治的にも経済的にも弱い状況です。そういう中でどう打開していくか考えたとき、その状況を海外に発信して、つながりを作っていくことが必要不可欠ではないでしょうか。例えば台湾や香港という、植民地支配されてきた地域をまとめて「辺境東アジア」という概念がありますが、それぞれのつながりは弱いんです。子ども食堂などの草の根の取り組みレベルになると、研究者の理念が実際の活動に活かせるかというと、そのギャップが埋まっていない。そこをどうにか埋めたい。つなげていきたい。そして、研究をすることで地域の人々に与える迷惑を自覚し、研究の成果をいかに地域へ還元していけるのかがこれからの私の課題です。

MIRAIは
第三の居場所

私にとってMIRAIは、「子ども食堂」のような第三の居場所です。研究が進まず悩みがちな日々ですが、MIRAIの先生方や院生とのたわいない会話の中で、日頃の悩みを口に出すだけで安心したり、問題が解決したり、多方面においてセーフティネットになっていると実感しています。この一年間、MIRAI生として活動する中で、新たにつながった人や物、新たな視点や課題の浮上など、多くの収穫がありました。自分にできることからMIRAIに貢献していきたいです。



MIRAIを創る人

3



小林 真也さん

profile……成蹊大学文学部国際文化学科卒業。東京外国語大学大学院国際日本専攻博士後期課程在学中。学部では異文化コミュニケーションや比較文化を学び、日本語教師養成課程を修了。元々の興味であった言語・教育・ゲームという要素をミックスし、大学院では日本語教育の学習活動の中にゲーム的要素を導入する「ゲーミフィケーション」の研究に取り組む。理論か実践に偏った先行研究の、橋渡しの役割を目指している。

大切なのは、面白いかどうかよりも自分が面白くしてやろうという精神

楽しいと思いつながる勉強するのが一番

私は別の大学から東京外国語大学の大学院に進学しました。研究テーマの「ゲーミフィケーション」はまだあまり知られていない分野ですが、日本語教育を専門とされ

ている石澤准教授が「分野はやや違うけど面白そうだからうちでやりますか」と指導を引き受けてくださいました。新しい分野に対して「わからないから」と拒否するのではなく、「わからないけど面白そうだから一緒に追求してみよう」と受け入れてくださる教員の存在は非常にありがたく、

知的で誠実な研究者に出会えたことに感謝をしています。自分の研究テーマにも関連しますが、面白い、楽しいと思いつながる学んだり追求したりできたらそれが一番いい。だから自分自身も楽しんで研究することを大切にしています。さらに言えば、面白いかどうかよりも、それを面白がる、自分が面白くしてやろうと思う精神が大切だと考えています。MIRAIへ参加したのも金銭的な理由からだけではなく、「面白そうだから挑戦してみよう」という精神があったからかもしれません。何が起きるのか、どんなことに会えるかわからないけれど、少しでも興味を持っているなら、恐れずに参加してみようという気持ちでMIRAIのイベントには毎回出席してるんですよ。

分野を越えてつながることの重要性

MIRAIの一番の魅力は、まず横のつながり、つまり研究分野が異なる学生とのつながりが得られること。大学院博士後期課程の学生というのは、自分の専門以外や社会との接点が少なく、自分ではその接点が探しづらいものです。自分の研究テーマが越境的なものだということもあり、専門の枠を越えてつながることの重要性は強く感じています。先日行われた北海道大学との合同合宿では、同室になった北大の理工系の学生と、夜中まで議論したりしました。北海道にいる理系の学生となると、普段は全く接点がない。その人たちと会えて交流できることだけで面白そうだからと参加してみましたが、思った以上に有意義な体験でした。また、自分だけでは出会えない「場」への道が開ける点もMIRAIゼミのいいところです。北大合宿にしてもそうですが、自分ひとりでは行けないし、行ったとしてもそれほど大勢の人に出会うことはできません。MIRAIから提供された「場」をうまく活用できるかどうかは本人次第ですが、まずはその「場」があることは重要だと思います。

社会に向けての問題共有能力を磨く

近年、リメディアル教育といって、大学の初年次教育等の中で、高校までではできなかったことの学び直しを行う動きがあります。その中で、文章作成つまりアカデミック

ライティングを、日本語教育の教員が指導するケースがあるのです。日本語教育はこれまで外国人に日本語を教える仕事と思われてきましたが、日本語話者を対象とした、改めての教育という場でもスキルを活かせる。日本語教育を幅広くとらえるといろいろな広がりが見えてきます。そういう意味では、アカデミア外でも広くいろいろな分野の人とつながりを持てる方が、キャリア的にも強みになるはずですよ。

文系の博士って何をやるの、と聞かれることがよくあります。もちろん自分自身にとっては意義や価値があると思って研究をしているわけですが、それを全く価値観の違う人にも伝えられないと意味がなくなってしまいます。研究を社会にアピールして、その問題は重要だから社会全体で考えなければいけないね、と思ってもらえるような問題共有能力、プレゼンテーションスキルは、磨いていきたいなと思っています。

MIRAIは今、プログラムとして確かな形が見え始めたような段階ですね。ただ、やっぱりあくまでも博士後期課程に在籍する一部の学生たちの活動なので、こういう動きはもっと修士学生や本学全体にも広げていくことが求められているのではないのでしょうか。

MIRAIは
つながる場

博士課程での研究はどうしても孤独になってしまいがちですが、それでは窮屈で視野が狭くなってしまおうと思います。広い視点を持っておくためにも、ぜひMIRAIと一緒に「つながって」みませんか？



自身の研究力を活かした新しいキャリア形成を目指すMIRAI生のさまざまな活動実践を支援します。自らのアイデアでやりたいことを企画し実現することができるこそ、MIRAIの魅力です。

research

能力強化開発

研究力強化支援

MIRAIゼミ◆

オリエンテーションセッション（4月、10月の初回）

- MIRAI活動の方向性の確認と価値観の確認

学生主体のワークショップ（2週間に1回程度）

- 自分の研究と社会との関係性を深掘りし考察するための問いを設定
- 問いと思考の共有と交流

学会発表スキル強化

学会発表・要旨作成勉強会

- プレゼン強化ワークショップ
- 学会に参加する希望者による相互のコメント交換ワークショップ



研究の社会実践・プロフェッショナル経験 インターンシップ、現場体験

学際的共同研究事業推進の実践経験◆

東京外国語大学内の学際研究共創センター（TReNDセンター）を活用した、研究会、勉強会の開催

TReNDセンターでの研究事業づくりへの参画◆

- TReNDセンターの研究会シリーズでの研究会開催実践
TReNDセンターは、研究分野の境界を超えて新たなつながりを生み出すための問い作り・関係作りを実践しています。MIRAI生の斬新なアイデアを発露する機会をTReNDセンターは支援します。未来を創造するためディシプリンを超えた問いを発信し、多くの研究者とのつながりを生み出してみましょう。

MIRAI共同研究の実践◆

- MIRAI生の自主的な共同研究活動の実践
共同研究としてチームを立ち上げることで研究力は飛躍的に向上します。自主的な共同研究活動を実践してみたいというMIRAI生の挑戦を支援します。

研究ポスター発表◆

異分野融合研究の探究

TReND研究会シリーズ

TReNDセンターは研究と社会を繋ぐ役割を担うため、学際研究が生まれる研究環境基盤・大学と社会との研究を通じた新しい関係構築を目指しワークショップや講演会を提供しています。自身の研究やキャリア感を深掘りするために積極的に参加しましょう。

講師体験

体験授業（MIRAIトーク）

高校生に向けた体験授業を通して、自分の研究をわかりやすく伝えるスキルを身につけましょう。

challenge

自分の枠から出る

キャリア開拓支援

社会課題・企業ニーズの理解：課題解決能力強化など

career

社会との
つながりを作る

先輩のキャリアをのぞいてみよう★

- 人文社会系ドクター卒業生との交流企画

社会に語りかける研究活動を考える◆

- サイエンスコミュニケーション活動体験ツアー★
- ゲームによるサイエンスコミュニケーションの手法の探求★

企業との交流会・キャリアプログラム受講制度★

- 大学間連携等の枠組みを活かした博士後期課程学生のキャリア情報提供
- キャリアイベント・マッチングイベントの紹介
- 各種キャリア講座の提供

つながり、コミュニティづくり

研究・研究キャリア交流会◆

- 他大学との共催によるドクター生交流会
- 北海道大学：博士学生のための異分野交流会★
- 大阪大学：フェロシップ事業 キャリア講演・ワークショップ★



「博士学生のための異分野交流会」で行われたポスターセッション。本学からは、小林真也さん・長谷川健司さんがポスター賞を受賞

研究能力強化及びキャリア形成・開拓に対する 多面的サポート、アドバイス

メンタリング

年2回のキャリアメンタリング◆

オフィスアワー

- 論文・研究相談
- 論文投稿、執筆アドバイス、コメント
- MIRAIプログラム受講相談

support

悩みをきき
サポートする

つながる MIRAI

MIRAIプロジェクトの実績

TReNDセンターでの 研究事業づくりへの参画

研究を個人研究から共同研究へと移行する過程は、自分の中の問いをより学際的な関心へと昇華させる挑戦です。

MIRAI生が企画したTReNDセンター講演会：『社会の中のAI研究会「21世紀の情報学的転回」』は、AIの技術発展ばかりが注目される中で、人間社会とAIとの関係性を問かけるテーマであり、学外からも多数の参加者を集めました。企画をきっかけに新しい研究者との出会いも生まれます。自身の研究フィールドを広げる挑戦を、MIRAIは応援します。

社会に語りかける 研究活動を考える

サイエンスコミュニケーションという理系の話と思いがちですが、研究の意義を俯瞰し広く社会と共有する形で表現することの重要性は人文社会系研究にとっても同じです。しかし、人文社会系の研究は展示の形で社会に還元することが困難な分野もあります。

2022年秋、国立民族学博物館において特別展「Homō loquēns『しゃべるヒト』——ことばの不思議を科学する」が開催されました。「コトバ」という本学の学生にとって馴染み深いテーマをどのように魅せることができるのか、実際の展示会場に赴き展示の主催者へのインタビューを通して、サイエンスコミュニケーションの意義や伝えたいことを表現する工夫について考察しました。

